

この問いに対して本書の著者は、奴隷主たちのキリスト教理解と黒人奴隷たちのキリスト教理解とは必ずから相違があり、黒人奴隷たちは、ひたすら「僕たる者よ。キリストに従うように、恐れおののきつつ、真心をこめて、肉による主人に従いなさい。」(エペソ人への手紙6:5)と説く奴隷主のキリスト教に反撥して、主にある兄弟・姉妹としての交わりを強調するキリスト教を己が物としていった、と答える。

しかしながら、奴隷主と黒人奴隷との間に「キリスト教徒の交わり」(“Christian fellowship”)が成り立つことを妨げる要因として、キリスト教徒である奴隷主がキリスト教徒となった黒人奴隷を懲罰と称して虐待するという問題、離婚や姦淫を禁じながら売却によって黒人奴隷夫婦を離散させる問題、さらには、特にバプテスト派の黒人教会のオートノミーの問題などがあって、黒人キリスト教徒たちは徐々に奴隷主たちの教会から分離・独立して、「見えざる制度」としての黒人教会をつくり上げていった。

以上を要するに、黒人奴隷制と深くかかわることになったキリスト教は、この場合もまた、本書の著者も言うように「両刃の剣」であって、奴隷主の側から説かれる時には支配の道具として黒人奴隷を馴化するために利用され、そのようなキリスト教を押しつけられた黒人奴隷たちは、そのキリスト教を聖書の光に照らして解釈し直し、黒人靈歌の例にも見られるように、自分たちの置かれた境遇をエジプトの苦役のもとに苦しんだ古代イスラエル民族の奴隷状況にひき比べ、聖書の使信の中に隷属状態からの解放の希望を読み取っている。同時にまた、黒人奴隷たちが理解したキリスト教は、彼らに現世の苦しみを一時的に忘れさせる阿片となっただけでなく、彼らに人間としての尊厳を教え、時には抵抗の手段ともなった。奴隷反乱を指導した Den-

mark Vesey や Nat Turner などが、いずれも聖書に通じていた黒人奴隷たちであったことは放なしとしない。「奴隷制のただ中であって宗教〔キリスト教〕は、奴隷たちにとって、意義をもつ自由と超絶の空間であった。」(p. 318)

キリスト教は本来、差別され抑圧された人々のための宗教——「奴隷の宗教」であった。本書『奴隷の宗教』は、一方では乏しい黒人教会の記録を活用し、他方、実際に奴隷体験をもつ数多くのアメリカ黒人に対して行なったインタビューから成る歴大な資料集 *The American Slave: A Composite Autobiography* (1936—1938) その他、あたうる限りの記録・文献をふまえて書かれた好著である、と言えるであろう。

Albert J. Raboteau: *Slave Religion; The “Invisible Institution” in the Antebellum South* (Oxford U. P., 1978)

倉石武四郎・折敷瀬 興 編 『岩波 日中辞典』

松本 昭

1965年から1983年におよぶ本書成立の過程は、本書「まえがき」冒頭に簡潔にのべられている。またこの「まえがき」は本書の一貫して求めた「日本人のための日中辞典」のあるべき姿がいかなるものであり、そのための作業がいかに困難なものであるかを説得力

をもって語っている。しかし、われわれは、1975年、倉石武四郎先生逝去後の8年間の折敷瀬氏の奮闘なくして本書が今日の形で世に出ることはありえなかったことも少なからぬ友人とともに知っている。敢えて火中の栗を拾い、倉石先生の遺志を継承し、その業を完成された折敷瀬氏に対し、倉石先生の不肖・不才の学生たる筆者は、ただただ感謝のほかはない。しかし、黙ってただその恩恵にあずかっているだけでは、あまりにも申し訳が立つまい。せめて、日本語とのかかわりにおいて中国語をよりよく理解するために、本書をいかに活用すべきか、また活用できるかを考えてみたい、というのが筆者の願いである。

辞典は本来工具書であるから、最初から順をおって読みすすめるものではなく、必要に応じて随時検索して利用するのが通常である。そして母国語を見出しとして対象の外国語をひく辞典は、外国語を見出しとして母国語でその意味用法を知る辞典にくらべて、(外国人と会話したり、手紙のやりとりをする機会の多い人は別として)一般には使用する機会が少ないものである。本書に対して、出版以来よせられている多くの、当を得た賛辞が、評者の中国での生活など実用の面に根ざしたものである場合が多いのも自然なことと思われる。(たとえば、笈久美子氏・「図書」'83.4月号;中根千枝氏・東京海上各務記念財団第4回優秀著書表彰式'84.1月における評など)しかし、発刊以来1年そこそこしかたっていないという時間的な制約もあり、本書について発表された文章類は、その多くが発刊直後の新刊紹介という形で書かれたものであるためもあり、中国語教育、研究の分野から本書を十分に検討評価したものは、日本ではまだ見られない。(中国では『辞書研究』'84年1期に陸尊悟:一部有特色的辞典《岩波日中辞典》があり、5ページ以上のスペースを用い、

編者の意図を十分理解した上での内在的な批判を試みている。)それどころか、日本の新刊紹介の中には、本書の「まえがき」にある「編纂における最も重要な基礎作業は、日本語の個々の単語の意味や用法が実際にそこに息づいている的確な文例を選び出すことであった。このような文例を得てこそ、対応する中国語を探求することの意味が生きてくるのである。」を引用した上で、「よい意味にも悪い意味にも本書の最大の特徴はこの点にある。」とのべ、本書はかかる「用例主義の辞典として頂点にある。」とか「訳語がよく白話化している。」などの点を長所としてあげつつ、「もっとも、これは用例主義の結果であり、日本語のフルセンテンスの用例に白話訳をほどこすことが主要な作業であった本書にとってみれば、当然の帰結として出てきたものといえる。」とし、「ところで、この日本語の的確な文例を見つけ出し、それに白話訳をほどこしたという点は、同時に本書の限界である、……〈日本語の世界〉の中国語への翻訳——それは本書に限らずこの種のものに一般的なのだが——は中国人の日本語理解にとってはふさわしいものであっても、日本人が中国語を綴るのにどうして有効なのか解せない。(雲間から富士が美しい姿をあらわした) (姿の項)を中国語に訳してみせるより、もっと中国人の中国語のなかから、中国奥に満ちたものを引けないのか。われわれにとってこの種の辞典が有用なのは、日本語の見出し語で、それに近似する中国人の息づく中国語の世界が開ける点にある。日本語の的確な例文もさることながら、中国人の発想に即した例文の方がわれわれにはより必要なのではなからうか。日本語の見出し語はその検索の便宜にすぎないと考えた方がよい。」——傍点は松本——とむすぶもの(大河内康憲氏・「言語」'83.8月号)さえある。これこそまさに「木によって魚を求める」(縁木求魚一日

中辞典〈木〉の項——これは白話訳ではない、日本語の文体に応じた適切な中国語の文体を編者は本書いたるところで存分に駆使している)のたぐいである。大河内氏の求める辞典は、本書の編者が行ったと全く同様の努力のもとに理想に近い中日辞典をまず完成させ、その辞典に、その訳語たる日本語からの逆引き索引をつけたものに等しいことになる。

日本〔語〕そのものを大切にせず、ただ対象たる中国〔語〕のこののみを求める一方通行的姿勢の中国〔語〕専門家(屋)の、日本に如何に多く、今までおり、今もまたいることか!! 編者の気持がごく平明にのべられているインタビュー記事を引用して大河内氏の考え方と対置しておこう。「編纂にあたって貫いて来た姿勢は、日本人にとっての辞典を作るということです。従来から、日本で出された中国語の教科書・辞典のたぐいは、日本人が使用するにもかかわらず、どうも日本の事情を考慮しないで中国のものをそのまま利用したものが多くみられました。「日不日、中不中」(日本〔語〕であって日本〔語〕でない、中国〔語〕であって中国〔語〕でない)のものがいたるところに氾濫している状況がありました。まず、この状況に我慢できない」「日中辞典にはとくにこのことが大切だと思うのです。中国の出版物から見出し語、用例を収集したものではありません。日本の生活文化を礎とすることばをきちんと把握、厳選し、それにどう中国語をあてはめるかということがポイントとなります。」「そうでなければ、日中辞典としての社会的機能を担えない」「日本では中国語をやっている人は少ないですね、大多数の人が使用している日本語をどう中国の人たちに間違いなく伝えるか、これこそ中国語をやる人たちの任務となるわけです。お互いの気持をことばで正しく通じあうことができなければ、いくら〈友好〉を

叫んでも空念仏に終わってしまう。従来の傾向として、日本の中国に関心ある人たちは、どうしても中国そしてそのことばをうのみにしてしまいがちなんですね。それを払拭することに力を傾注しました。」「日本語の微妙なニュアンス、こまやかさをどう中国語で表現するか」「それには、まず日本語の意義をしっかり把握しなければなりません。あくまでも日本語を大切に、見出し語を厳選し、それにとりまう用例を吟味し」「そしてこれらに対応する中国語」は「中国語の用法・習慣からずれたものはいけない」「そのうえ、限りあるスペースの中で辞書としてどう表示するかという問題が重なってきます。いたずらに情報を多くしても学習者の混乱を招くだけです。とにかく、日本語と中国語の往復のくり返しで、一語一語それぞれの二つのことばの接点を究めるために苦心しました。」(雑誌「中国語」'83.5月号)と。

こういう意味での「悪戦苦闘」を「日本語の世界」の中国語への翻訳と表現しきれる大河内氏と本書の編者との間には越えたい深淵が横たわっているように私には思われる。(因みに、日本の中国関係の辞典や出版物の中には、中国で出来た書物を右から左へと短時日の間に日本語訳して出版・発行しているものが少なくないことも指摘しておこう。ただ大河内氏はこういう仕事には全く関わらない方であることは筆者もよく知っている。念のため。)

本書「はしがき」にいう「日本語と中国語の相違点をはっきり弁別し、その差異の質を深く認識してはじめて、日本語を中国語に置き換えるということが可能になる」という編者の信念に筆者も強く共感を覚えるのだが、また同時に、それがどれだけ編者の辞典編纂上の実際の歩みを拘束し、妥協を許さぬ苦闘を強いるものとなったであろうかということ、そして更には、ついにさまざまな「わりきれ

なさ」を残したまま、本書を刊行せざるを得なくさせたであろうかということさえ推測させるのである。しかし、かかる編者の苦闘のうらづけがあるからこそ、素直に「面白くて夜も寝ずによみとおした」（松枝茂夫氏 '83年4月、辞典完成祝賀会での談話）とか、「見出し語に対する訳と、例文の訳とを見比べてみれば、表現法と考え方の違いについて考えてみる楽しみを味わうことができ」「日本語を中国語に移すむずかしさ、おもしろさを考える上で……多くの材料と教示・示唆を与えてくれる。」（菱沼透・図書新聞 345号）といった感想を多くの人々に抱かせるのである。

しかしまた、本書が上述の編者の信念とそれにもとづく実践の最初の結実であってみれば、編者自身も感じているような、満足しきれない点や不備もあるはずである。また折角の編者の苦心のある所が、利用者の語学能力

の低さや理解力の不十分さのために、読みとれぬ場合もありうるので、「凡例」部分の内容を思い切って拡充することを希望したい。たとえば、菱沼氏も指摘している、見出し語選択の基準をもう少し明確にし、日本語としては基本的な語であっても採択しない語が、何故に落とされているか、対応する中国語の訳語のあげられない類の語（なとり、たたみ、のような）はどこまで採択するか、また「～はじめる」「～かねる」のような派生語の扱い方など整理と工夫の余地はありそうだ。特に、見出し語とそれに対応する訳語、用例、それに対応する訳文、それら相互の関係にはさまざまなケースが存在し、時に編者の意図する所が判らぬ場合もある。利用者のレベルをごく低い所に想定した、「利用の手引き」のようなものを附加されることも望みたい。

倉石武四郎・折敷瀬 興 編「岩波 日中辞典」'83年、岩波書店